

Rachel DiNitto: *Fukushima Fiction: The Literary Landscape of Japan's Triple Disaster*

Honolulu: University of Hawai'i Press, 2019. ix + 228pp.

岩田和男

何故日本文学を専門とする Rachel DiNitto オレゴン大学准教授による研究書を、英文学研究書を対象とすべき *JLY* の書評書として評者が選んだのか、まず、その理由を説明することで、条件付きでお認めいただいた編集委員会のご厚意に応えたい。題名から察しがつくように、本書は東日本大震災の福島第一原子力発電所事故による放射線被害がもたらした様々な社会的・心理的影響を、日本文学作品の中から読み解こうとしたものである。あくまで題材は日本文学であるが、事故の影響が世界中の人々に与えた影響の大きさに見合うだけの幅広い関連側面から光を当てることで、その文化現象としての実相の枠組みを明らかにしようとした意欲的な研究成果の一端である。したがって、言及される関連文学作品についても、9/11 を題材にした Don DeLillo の小説 *Falling Man* (2007) や Hurricane Katrina を巡る言説（これを文学作品に加えるかどうかについては後述）に言及したり、Ruth Ozeki の *A Tale for the Time Being* (2013) や Alexander Kluge の *The Fifth Book* (2012) を挙げて事故をめぐる世界文学の可能性に言及するなど、その研究の枠組みは大いに比較文学的となっている。当然だろう。世界中から関心を集めた未曾有の大事故や災害とは、いわゆる単発的な事故や自然現象とだけ捉えたのでは実像が捉えられないような、もっと大きな時代的、文明的転換点との関連を人類に求めることを秘めた現象の一つひとつと、現在では考えられるべきだからである。

ここではそういう社会のあり方をリスク社会のそれと呼んでおく。以前なら点で捉えられていた歴史的対象を、ヒトの移動がもたらす、政治・経済・文化

を巻き込んだ現象という鍵概念を用いて考えてみると、世界の人に関わってしまう問題のあり方に日本文学も関わらざるを得ない。そういうことの、ある意味で、本書は例証と言えるところからである。英文学研究だって例外ではないはずだ。文学作品を読み解くとは、たとえ一作品を対象にしたものであっても、そういう文化現象との足掛かりをどこかで嗅ぎ分けながら進めるものではないだろうか。100年前のモダニズムは間違いなくそういう文脈の中に、限定的な世界ではあったが、関わっていた。今や言及されない日はないグローバリゼーションの世のなかである。その傾向は拡大し加速し増殖しこそすれ、減少・縮小することは、少なくとも今まではなかった。環境問題しかりである。本書を対象書にと考えたのは去年なので、COVID-19なる感染症のことなど思いも及ばなかったが、起きている不可視性は放射線のそれと同じである。

しかし、掲げる理念が如何に崇高であれ、その思い通りに説得的かつ実証的に表現するのが如何に難しいことであるかを見せつけられた。そんな読後感である。ほぼすべての関連日本語・英語文献に当たった、丁寧な研究であるだけに、却って不備が目立つ。ただし、それは本書の非ではない。そんな時代の流れを見据えたフクシマ・フィクション論が2019年に登場するわけがないからである。何度も言及される「低線量下での放射能時代（ニュクリアー・エイジ）に生きる私たち」の感覚はまだ始まったばかりであり、それは実は、帰還が始まった2017年（エピローグの話題からして、この年こそが、本書が原稿を書き上げた時と推察される）がまさに始まりであって、その年に書き終えられた本書にその後のあり方を踏まえた当該論が書けるはずもない。

そうであるならば、この書評は、フクシマ・フィクション論は将来どうあるべきなのか、それを考察する場とできるかもしれない。そう考えて、本書を書評することにする。

まず、副題にもある“triple disaster”の意味するところ、すなわち大地震に加えて津波の大被害、付随する原発事故という東日本大震災の多面性がIntroductionにおいて強調されている。この災害には、単なる自然災害にとどまる範囲での「震災」と、人災と呼ぶべき要素が加わった「原発事故」との、

大きく二つに分かれる特徴があり、それが文学作品に与えた影響の複雑さこそがタイトルの「フクシマ・フィクション」の意味するところであると DiNitto は言う。であるから、それは被曝者というかたちで被害者が明確に規定される広島・長崎のいわゆる原爆文学との違いも浮き彫りにするし、そこから当該フィクションの特異性、辺境「東北」という日本の特殊な事情を色濃く映す文化的特性ゆえの特異性も前景化される。

しかし、それでは、他の同様のケースとの共通点を見出しづらくしてしまうから、世界文学の契機を「フクシマ・フィクション」に見るという企てを実りあるものにするために、DiNitto は、チェルノブイリ原発事故から得た教訓として、誰もが放射線被害のリスクを負う社会を生きているという認識から始めることを提案する。それは、第4章で中心的に論じられることになる、*States of Suspense: The Nuclear Age, Postmodernism and United States Fiction and Prose* (2008) の中で Daniel Cordle が主張している、1945 年以後の原子力が「新しいリアリティの条件」となった世界観に基づく。それがフクシマ・フィクションの、ある意味多様なスタイルを支えているのだが、DiNitto はそこから、想像力を越えた事故の影響というものをわからないながらも画定していく作業プロセスとして、想像力に富んだ文学的営為の力を見ようとする。そこに本書のオリジナリティがある。

もう一つ、DiNitto が依拠している枠組みが *Narrative Trauma: On the Impact of Collective Suffering* (2011) において Alexander and Breese が展開している集合的なトラウマ体験に関する議論である。震災で起きた出来事を言語化する文学的営為の総称としてのフクシマ・フィクションをその議論に接合することで、社会的に構成されるものとして被害者の立場を社会に訴える集合的トラウマ体験を形成することを明らかにしようとする。それが第1章である。とりわけ問題視されるのが、政府が避難指示を出す際に第一原発からの半径を、最初は小さく 10 キロ圏内とした後で最終的には 20 キロ圏内まで広げたことの混乱、そして、風向きと放射線を帯びたプルームが風に乗ってどの方面に多く運ばれたかを知らせなかったがために、結果的にその方面に避難した人、避難指示がなかったが為に被曝することになった人が少なからずいたことによる混乱である。その

ことが、被害者が誰なのか、実は明確に線引きできなくなった。そのことに彼女は着目している。

ところが、重松清の「しおり」や「また次の春へ」、佐伯一麦の「日和山」、田口ランディ「ゾーンにて」などをかなり丁寧に読み込む作業から立ち現れる現実のフクシマ・フィクションは、被害者の複雑さを反映するには違いないが、それぞれのコミュニティでの苦悩を代表的に語るものとなっている。だから、現在の苦境を理解し明日への一步を踏み出すための、「トラウマ体験としての放射線に囲まれた今を生きる」物語という括りには説得力があるのだが、たとえばDiNittoがするように、政府が語る「団結」へのアンチテーゼとして、政府への不信感とか、社会的な「亀裂」を乗り越えようとする集合的なトラウマ体験の言語化というかたちに収斂させようとすると、不協和音が生じるのである。

それが第2章でのDiNittoの結論と関係していると評者には見えた。古川日出男の『馬よ』を中心に、東北が東京という中央に対して置かれてきた辺境の地であったことを踏まえた東北地方の苦悩を、事故と関連づけて描いた集合的トラウマ体験の作品を扱うこの章で、彼女は文体的にも捻りを入れた古川の作品を高く評価する。しかし、古川は、彼女が望むように、誰かを断罪することで自らの被害者性を浮き彫りにして社会の「亀裂」を鮮明にしたりはしない。むしろ、今まで東北の人たちが（あるいはフクシマの人たちが）原発に依存してきたあり方を自己批判したりする。彼女は、そういう、旗幟を鮮明にしないことを古川の瑕疵と言うが、評者の伊達郡川俣町山木屋地区での視察体験や、双葉郡富岡町のNPO法人「富岡町3.11を語る会」語り部による現地での話を総合すると、この古川の逡巡はとてもよくわかるところなのである。もちろん彼女はこういう逡巡を無視しているわけではない。しかし、第3章の広島・長崎と同じフレームワークで被害者意識を論じたいがために、最終的には、その自己批判が意味する地平を読み違えているように思えるのだ。

フクシマ・フィクションは、犠牲者も非犠牲者も同様に、自分たちが反原子力示威運動の参加者であるかどうかには関心を払わない。それぞれがそれぞれに災害のことを書いている。リスク社会における放射能と戦争兵器としての核

とでは、当事者意識は大きく違うのだから、当然である。事実、第3章で扱われる玄侑宗久、川上弘美、津島佑子によるフクシマ・フィクションが示すのはまさに新世代の「被曝者」である。放射線被害を恐れるあまり、我が子を殺してしまう話となっている佐藤裕也のベッドサイド・マードケーケースが示すように、彼らが描く姿は、被害者／加害者関係を無化するような共犯性をもたらず放射線災害の本質、すなわち、フクシマ以後の社会のリアリティ活写である。ところが、そう言って評価するDiNittoが、今度は、フクシマ・フィクションと広島・長崎に代表される反原子力示威運動との結節点を形成すると言って、長崎被曝者として言うべきことをきちんと主張してきたとされる林京子を紹介するのである。20世紀には原爆被害を、21世紀には原発事故を介した放射線の脅威を語って、リスク社会における放射線被害不安へ目を開いたからだが、先ほども述べたように、そうやって国家批判に収斂させてしまっは、肝心の被害者／加害者関係の無化という共犯性はどこかに追いやられてしまうことになってしまう。そうなりはしないか。

確かに、放射線被害は、間接的には、原子力平和利用という政策が核開発に微妙に接合された国家的陰謀の産物である。その歴史的経緯は、第4章において、既に挙げたDaniel Cordleが掲げる「新しいリアリティの条件」としての原子力という枠組みを援用しつつ、アメリカ発の原子力平和利用の欺瞞告発として紹介されている。その象徴とも言うべきワシントン州リッチランドの「パラダイス」論という幻想は、チェルノブイリのプリチャピを生み双葉町を生むのだから、その欺瞞を明らかにしたのが二つの原発事故であったことは言うまでもない。しかし、その文脈に沿って紹介される、佐藤裕也のベッドサイド・マードケーケース・シリーズ、帰還後の生活を想像した恐怖物語である吉村萬壱『ボラード病』（2014年）、チェルノブイリ事故によってキノコ狩りができなくなった世界を描いた黒川創『いつかこの世界で起こっていたこと』（2012年）、帰還後の生活を想像して書かれた田口ランディ「モルモット」（2013年）が描く世界は、そういう欺瞞告発とはどこか違う位相を有するのだ。文学的想像力を駆使した、これら帰還後の生活描写は、総じて、放射線の影響を受けることによる人々の生活の悲観と悲慘が描出されている。玄侑宗久「光の山」（2013年）

も、「ホルミシス効果」と呼ばれる、極めて低濃度（低線量）の毒物や放射線などが、むしろ良い影響をもたらす効果を表わす語に着想を得て、仮置場にうず高く積み上げられた除染ごみを「光り輝く山」に見立てて揶揄した物語であるが、その微妙な揶揄に残る独特な「苦み」に、東北に関わる人々の自己批判にも似た感慨が残っていて、とても国家批判で収まりきらない何かを感じないではいられないのである。

評者の疑念はまさにここにある。国家批判，政治批判，政策批判は確かに必要だ。そういう悪手を思いとどまらせるためにも，文学が糾弾することは大事である。しかし，長崎の原爆被害を目の当たりにした人々の手記からだって，ストレートな体制批判を見つけるのは実は意外に難しい。チェルノブイリ報告もそうだったが，あまりの悲惨を体験した人々はそれを突き抜けた深い悲しみと絶望の淵にいる。そういう人々に，こういう事態をもたらしたものに対する「深い怒り」を見出すことはできるが，その絶望から垣間見える一筋の「光」という可能性は，再度言うが，ストレートな国家批判ではとても収まりきらないものなのである。

確かに，一部のフクシマ・フィクションには国家批判がある。関連があるのはわからないでもない。特にプルートピアという歴史的経緯を踏まえると，本書は蒙を啓いてくれるところも多い。しかし，たとえば，多和田葉子「不死の島」（2013年）の，事故により鎖国状態の日本（汚染したために世界からのけ者扱いされる日本）に戻れない話などは，原発事故をきっかけにして内向きになりがちな政権批判と読んだほうが納得しやすい。これらの国家批判をオーウェル流のイメージ（140）でまとめるのはわからないでもないが，そのまとめ方ではこのリスク社会の特徴をあぶりだしたうえでの，「深い怒り」の「淵から見えてくる「光」には到達できない気がするのだ。

そもそもグローバリゼーションと軌を一にするリスク社会とは，国家が形骸化したという認識から始まるのではないか。言い換えるならば，フクシマという，住めるところで原子力危機が顕在化している社会の出現とは，それまでの国家統制とは次元を異にしている，そういう認識が欠かせないのではないか。

それは「真の意味でのブルトピアの崩壊」であり、プルトニウム・リスク社会なのである。グローバリゼーション・リスク、感染症リスクと同じである。その点、チェルノブイリとは違い、自然に放射線が半減するのを待つには人口が多すぎる日本では、そこに住まわれないわけにはいかない。そのことの意味は果てしなく大きい。だから、そのことがフクシマ・フィクションをある方向に変えたという DiNitto の正しい認識の延長線上に、やはり解は求められるべきなのではないだろうか。それが放射線と共に生きる社会が新しい標準になる日本社会ということだと評者は思う。

その意味において、本書に決定的に欠落しているのは、その失われたコミュニティに現に生きている人々の存在である。田口ランディの「モルモット」は、「日本地図上から消された場所」（本書 131）として被災地への帰還を描くが、しかし、その失われたコミュニティに現に住む人々は、その姿が彷彿させるチェルノブイリ近郊で違法に存在している老婆たちとは根本的にあり方が違う。その視点を本書が持ちようもないのは、冒頭にも触れたように、ひとえに書かれた時点によるもので、本書の非ではない。しかし、その欠落は、結果的に現実を見誤ると評者は思う。

仮初めと言われようとも復興は復興である。帰還が可能となった地域に現に人が（仮に超少数であろうとも）還ってきている現実を見ると、「地図から消された地域」という表現は、その人々にどう響くのだろう。想像しないではいられない。何もなかった、まさに「荒地」であった場所に、「復興」が成った日から、確実に賑わいが、何事もなかったかのような「平安」が戻ってきているのを目の当たりにすると、政府・国家を糾弾するために「地図から消えた場所」と表現して何かを断罪する文学的営為がもたらす禍に思いを致さざるを得ないのだ。こういう文学は石牟礼道子を生むことはないだろう。その意味で言うと、被災地を訪れるフクシマ・フィクションの主人公が、おしなべて、都会での暮らしに病んだ人々、社会的に不適應となった人々であることに、本書が挙げている文学的想像力の限界を思わずにいられない。「地図から消された場所」に帰還した人々が、自らのことを外国の研究者に「こういう実生活上の被害者」（these real-life victims 134）と表現されているという事実は案外重い

ではないか。極めて情緒的な反応と言われるかもしれないが、評者はその感情を掬い取ることも文学研究の役目ではないかと考え始めている。

この書評が、フクシマ・フィクション論は将来どうあるべきなのか、それを考察する場とできるかもしれない、と言ったのはこの謂いである。第2章においてDiNittoはハリケーン・カトリーナと東日本大震災の災害の共通点を指摘しているが、相違点も指摘していて、前者が地域災害であるのに対して、後者が国家的災害であることを挙げている。しかし、彼女自身が古川の『馬よ』に見たように、東日本大震災、とりわけ原発事故が地域災害であったという視点は、もっと重要なのではないかと思う。たとえば、カトリーナの被害が地域限定的であった分、ニュー・オーリンズの崩壊を自分たちの手で修復しようとする独自の草の根活動が市民の結束を強めたと言われているが、そのことを突き合わせてみると、ローカルであることの逆説とは、フクシマ・フィクションがグローバリゼーションと深く関わっているだけに、より一層意味を持つはずなのである。だから、もっと包括的なフクシマ・フィクション論を構築するためには、人々の暮らし、低放射線量下で暮らす人々の暮らしを観察し考察するための仕掛け、すなわち、地域コミュニティの崩壊・再生をライフ・ライティングの問題として考える地平が欠かせないと評者は考えている。英文学研究において脚光を浴びつつあるこのジャンルは、地域に根差しながら普遍的な問題を考察する重要な手掛かりになるはずだからだ。その方法について論じるのは本書評の目指すところではないので割愛するが、それはおそらくフィクションの概念を揺さぶることだろう。DiNittoにこの視点が欠落していることだけは指摘しておきたい。